

『資本論』の構成と成立過程

I、『資本論』の構成

①「第一部 資本の生産過程」は、「資本の一般的本性」、「資本の運動法則それ自体」、つまり、資本主義の「特徴」・「要素」を論究している。

②「第二部 資本の流通過程」は、資本主義の「骨格」・「軀体」・「構造」を論究している。

「最後の章」の推測……「資本主義的生産様式のもとでの拡大再生産の限界」または「拡大再生産の崩壊・資本の流通過程の崩壊」というようなタイトル

③「第三部 資本主義的生産の総過程(マルクスの原題は「総過程の諸形象化」——青山)」は、資本主義の「器官」が資本主義の「骨格」と一体になっての運動(直接的な現象)を通じて資本の運動法則が貫徹するメカニズムを究明し、三つの階級の、すなわち資本家、土地所有者および賃労働者の経済的な諸関連を暴き、資本主義的生産様式の「解体」を、ブルジョア社会の克服にまでいたるべき階級闘争として論じる計画

1868年のマルクスのエンゲルスあての手紙

マルクスはエンゲルスあての1868年の手紙で、『資本論』は、「資本の一般的本性」を究明し、「三つの階級の、すなわち資本家、土地所有者および賃労働者の経済的な諸関連を暴」き、「資本主義的生産様式の『解体』を、ブルジョア社会の克服にまでいたるべき階級闘争として論じるつもり」であるといい、「第2巻は大部分があまりにも高度に理論的なので、ぼくは信用に関する章を、ぺてんと商業道徳との実状の告発に利用するだろう」と述べている。

II、『資本論』の成立過程と構成

A. 『経済学批判』から『資本論』へ

『『剰余価値学説史』(1)』(大月版、1970年9月30日)の「ドイツ社会主義統一党中央委員会付属マルクス=レーニン主義研究所」の序文から。

①『経済学批判』のプラン(1858-1862年)

『『経済学批判』の序文や1858-1862年までの時期の多数の手紙のなかで、さらに1861年から1863年までの手稿そのもののなかで」(P14)次のような著作の構成プランが出てくる。

I 資本について

1 資本一般

a 商品

b 貨幣

c 資本

資本の生産過程

1 貨幣の資本への転化

2 絶対的剰余価値

3 相対的剰余価値

- 4 両者の組合せ
- 5 剰余価値に関する諸学説

資本の流通過程

両過程の統一 または資本と利潤 利子

- 2 競争
 - 3 信用
 - 4 株式資本
- II 土地所有
- III 賃労働
- IV 国家
- V 外国貿易
- VI 世界市場

② 〈1861～1863年草稿〉と『資本論』の関係

〈1861～1863年草稿〉は、23冊のノートから成っていて、「1859年に刊行された『経済学批判』第一冊の続きをなして、同じ題名をもっている。それは、マルクスの経済学の主著のすべての部分の、たとえ細目ではまだ完成していないとはいえ、最初の体系的な草案である。最初の5冊と部分的には第19冊から第23冊までのノートは、後の『資本論』第一巻の内容を包括している。第21冊から第23冊までのなかでは『資本論』のいくつかの論題が取り扱われ、そのなかには第二巻の諸論題が含まれている。第三巻の諸問題には第16冊と第17冊とがあてられている。手稿中の最も大きく最も完成に近い部分をなしているのは、『剰余価値に関する諸学説』である。それは第6冊から第15冊までと第18冊とにわたっており、さらにその他の諸冊のなかの歴史的な素描を含んでいて、約110印刷ボーゲンの大きさをもっている。」なお、23冊のノートの全体のボリュームは約200印刷ボーゲンなので、半分以上の大きさをしめている。『剰余価値に関する諸学説』は1862年1月から1863年7月までの間に執筆された。(P13-14)

③ 『経済学批判』から『資本論』へ

『剰余価値に関する諸学説』の仕事をしているあいだに、マルクスが研究した問題の範囲はますます大きく広がって行った。1863年にはまだマルクスは歴史的-批判的資料を「資本一般」に関する彼の研究の理論的な諸篇に配分しようと思っていたのであって、それは『資本論』の第一巻および第三巻のプラン草案からも明らかである。ところが、マルクスが最初はただ一つの章だけのために予定していたところの、(1)資本の生産過程、(2)資本の流通過程、(3)両過程の統一または資本と利潤、という区分が理論的な著作全体にたいしてもつ意義は、ますます明らかになってきた。この編成が非常に重要であり決定的であることが判明してきて、最初のプランでは独立の諸篇をなすはずだった諸論題(たとえば「諸資本の競争」、「信用」、「土地所有」)もしだいにこの編成のなかに入れられるようになった。こうして、三つの理論的な部分がますます明瞭な輪郭を得てきて、経済学のすべての理論的な問題をそのなかに取り入れてくるにつれて、マルクスは、『剰余価値に関する諸学説』は一つの独立な部分をなし第4部として全著作の結びとなるべきだ、という確信をますます強固にしたのである。(P17-18)

B. 『資本論』の成立過程

『資本論』第三部第1稿のMEGAの「解題」と「成立と来歴」から

大谷禎之介氏の「『マルクスの利子生み資本論』2」に収録されている MEGA 第Ⅱ部門第4巻第2分冊に収められたマルクスの『資本論』第三部第1稿についての「解題」と「成立と来歴」とによるマルクスの「第三部」の構想の「熟慮」の軌跡について。

①三つの草案の三つのそれぞれ異なった表題

「1857年から1865年までのあいだに成立した、『資本論』第3部のそれぞれ異なる〔三つの〕草案は、苦労を重ねた、けっして直線的ではなかった研究過程を反映している。」

〈1857～1858年草稿〉

「第3の項目。果実をもたらすものとしての資本。利子。利潤。(生産費用、等々)」

〈1861～1863年草稿〉

「第3章 資本と利潤。」

〈第三部第一稿 1863～1865年草稿〉

「総過程の諸形象化」

という、三つの「それぞれ異なった表題がすでに、資本の分析の最初のプランが改作されたことを示唆している。」(P384)

②「1861～1863年草稿」から『資本論』への道

『資本論』は「資本の一般的本性」を取り扱う

「マルクスは、資本主義的生産様式の若干の現象には意識的に手をつけなかった。なぜならそれらの現象は『資本論』プランの外にあるものだったからである。このことは、市場価格の運動、信用制度の個々の用具についても言えるし、また土地所有および賃労働の、恐慌の、世界市場での資本の運動の、そして国家の経済的機能の、細目にわたる研究についても言える。第3部の草稿でマルクスが述べたように、資本主義的生産様式のこれらのより具体的な諸形態は、あるいは書かれるかもしれない『資本論』の続編に保留されていた。かれの著作が取り扱うべきものは資本の一般的本性であった。」(P388)

叙述の仕方の転換

「マルクスははじめ、『資本一般』と資本の『実在的な』運動——競争と信用——とを徹底して分離していたが、彼はこの分離をしだいに放棄した。『……要綱』(「経済学批判要綱」、1857～1858年草稿のこと——青山)のあと、そして『……諸学説』(「剰余価値学説史」のこと——青山)の執筆にかかる直前には、彼は〔『1861～1863年草稿』すなわち23冊のノートの中の〕『最後のノート』のなかでまだ、剰余価値と利潤との区別は一つの転換ではなくて、二つの転換で示されるべきだと考えていた。」(P386)しかし、『……諸学説』のなかで、マルクスはこの方法を事実上廃棄した。研究の過程では有効だと認められてきたそのような切断のもつ諸限界が彼にわかってきたのであって、彼は、1862年12月のプラン草案が証明しているように、経済的諸関係の最も重要なもろもろの形態上の区別を資本関係の叙述のなかに取り入れようと考えたのである。それは『資本論』の第1部および第3部のための構成プランだったが、マルクスは、これらの部の執筆を進めるなかで、これらの構成プランにさらにもろもろの変更を加えていった。」(P386-387)

なぜ、「第1部」の執筆のあと「第2部」ではなく「第3部」を書いたのか

「第1部」第6章のあと「第3部」第2章を書いた理由について、MEGAの「解題」は、

次のように述べています。

「第1部から第3部に移ったことは、明らかに、マルクスが、本質と直接的な現象との、問題を孕んだ関連を矛盾なく説明すること、運動法則それ自体を暴くばかりでなく、同じくこの法則の貫徹メカニズムを証明することにも努めていたことに帰せられるべきものであった。彼の考えでは、理論全体の内的な一貫性はこのことにもとづいているのである。彼にとってまずもって肝心であったのは、問題の二律背反を明示的にはっきりさせ、科学的に批判的な解決を与えることであったが、最後には、体系的に論述することに重きが置かれていた。」(P389-390)と。

そして、第3部の執筆を中断し第2部の草案を書いた理由については、「成立と来歴」で、「その理由はたぶん、『1861～1863年草稿』のノートXVIIでは利潤の平均利潤への転化がまだ包括的には仕上げられていなかったことにあったのであろう。……叙述の論理によって、結局マルクスは、当該の欠落部分を埋めることを、それゆえに第3部の執筆を中断してまず第2部を仕上げられることを強制されたのである。」(P403-404)と述べています。

つまり、「第1部」の執筆のあと「第2部」ではなく「第3部」の第2章(『資本論』では「章」は「篇」となっている——青山)→第1章→第3章と書いた理由と、今度は第3部の執筆を中断し第2部の草案を書いた理由とは、基本的に同じものです。

そして、1862年12月のプラン草案の「8)産業利潤と利子とへの利潤の分裂。商業資本。貨幣資本。」を『資本論』では「第4章」と「第5章」との二つの章に分割したことについて述べている次の文章もそのことをよくあらわしており、マルクスの「叙述の仕方の転換」によるものです。

「第2部の執筆からえられたもろもろの認識がすでにこの変更の根拠となっていたのかもしれない。剰余価値を生産する諸資本のあいだの競争戦のもろもろの基本的な法則性を論じている、草案の最初の三つの章を書いたのちに、マルクスが直面したのは、特殊的、派生的な資本諸形態の叙述は生産的資本の諸変態の叙述からどのようにして厳密に区切られるべきか、両者のあいだの諸移行は個々的にはどのような姿態をとるのか、という問題であった。この問題の解決は、資本の流通過程の分析を前提していた。最後に第3部で展開されているような諸資本の現実的運動を論じることができるようになる前に、まずもって、諸資本のそのような自立化の可能性が——つまり諸資本の形態的運動が——表現されなければならなかった。そのさいに、商人資本と利子生み資本とは二つの質的に異なる自立的な資本形態だ、という認識が固まったのであって、このことが、この両形態を別個に叙述することを要求したのである。」(P405)

ただし、私はこの文章の最後のセンテンスには同意できません。マルクスは、当然、「商人資本と利子生み資本とは二つの質的に異なる自立的な資本形態だ」という「認識」はもっていたが、研究から著作として『資本論』を世に出すにあたって、「質的に異なる自立」性にを明確にした「章」立てにすることが、有効であり枝ぶりの良い作品になると考えたのだと思います。

これらの執筆の軌跡は、マルクスが『剰余価値学説史』執筆前の研究の方法に基づく叙述の仕方から、本質と直接的な現象とのシームレスな貫徹メカニズムを示し、体系的に論述することに叙述の仕方を変えたことの現れだだと思います。

「1861～1863年草稿」の成熟度を示す二つの例

「マルクスは『1861 - 1863 年草稿』で、商人資本が自己の特殊的機能として流通過程を媒介する、流通のなかで自立化された資本形態であることを明らかにした。」一方、まだ、「『1861 - 1863 年草稿』のなかにあつて第五章(利子と企業利得とへの利潤の分裂。利子生み資本。——青山)の執筆にマルクスが利用できたものは、さらに具体化することを必要としていた一般的記述だけであった。」(P392)

「マルクスは『1861 - 1863 年草稿』からの少なからぬ章句(第3部の——青山)をこの原稿に転用した。」「第3部のために構想上の基礎として役だったのは、1862年12月に作成された第3篇『資本と利潤』のためのプラン草案である。」(P398)

プラン草案は第3部でどのように発展させられたか

⑦『資本論』に、ブルジョア経済学の歴史についての第4部をもうけることを決心し、プラン草案関連部分(項目の3. 5. 7. 11)を除外した。「このやりかたは、すでに1863 - 1864年執筆の第1部の草案でもとられていた」。(P399)

⑧「マルクスは、第3部そのものの構成を修正した。」(P400)

マルクスが「プラン」を書いた段階では、マルクスは、絶対地代を「価値と生産価格との区別のための『例証』として」(P391)として、「価値の生産価格への転化についての学説」(P400)の試金石として使うアイデアをもっていたが、「『……諸学説』で、最終的に彼の地代理論を、絶対地代と差額地代との統一として展開」(P394)することによって、「絶対地代はもはや『例証』として考えられるのではなくて、もっと包括的に、資本主義における土地所有にかかわる本質的なものを表現するような仕方で考察され」(P401)、第3部では、「地代」を「農業における剰余価値生産の独自の形態として提示」(P391)することとなった。

マルクスは、プラン草案の「8)産業利潤と利子とへの利潤の分裂。商業資本。貨幣資本。」を熟慮のすえ、第4章と第5章の二つの章に分割した。

上記、『資本論』の成立過程』の概略

『剰余価値学説史』(1) (大月版、1970年9月30日)の「ドイツ社会主義統一党中央委員会附属マルクス＝レーニン主義研究所」の序文と大谷禎之介氏の「『マルクスの利子生み資本論』2」に収録されているMEGA第II部門第4巻第2分冊の『資本論』第三部第1稿についての「解題」と「成立と来歴」とに依拠して、『資本論』の成立過程を概略します。

マルクスの『経済学批判』のプランは、「I資本について」、「II土地所有」、「III賃労働」、「IV国家」、「V外国貿易」および「VI世界市場」という執筆構想に基づき、「I資本について」を「1資本一般」、「2競争」、「3信用」および「4株式資本」の四部構成とし、スタートの「1資本一般」は、「a商品」、「b貨幣」および「c資本」の三篇を設けるという設計で、1859年に刊行された『経済学批判』第一冊は「1資本一般」の「a商品」と「b貨幣」を扱っています。23冊のノートから成る「1861～1863年草稿」はその続編のための「草稿」です。

〈参考『経済学批判』のプラン(1858-1862年)〉

I 資本について

1 資本一般

a 商品

b 貨幣

c 資本

資本の生産過程

1 貨幣の資本への転化

2 絶対的剰余価値

3 相対的剰余価値

4 両者の組合せ

5 剰余価値に関する諸学説

資本の流通過程

両過程の統一 または資本と利潤 利子

2 競争

3 信用

4 株式資本

II 土地所有

III 賃労働

IV 国家

V 外国貿易

VI 世界市場

「1861～1863年草稿」は「1 資本一般」の「c 資本」の構成要素である「資本の生産過程」、「資本の流通過程」および「両過程の統一または資本と利潤」というテーマを扱い、「剰余価値に関する諸学説」は「資本の生産過程」の歴史的補論として、1862年1月から1863年7月までの間に執筆されました。だから、マルクスは1863年にはまだ、歴史的—批判的資料である「剰余価値に関する諸学説」を「資本一般」に関する研究の理論的な諸篇に配分しようと思っていました。しかし、『剰余価値に関する諸学説』の仕事をしている間に、マルクスが研究した問題の範囲はますます大きく広がって行き、マルクスが最初はただ一つの章だけのために予定していたところの、(1)資本の生産過程、(2)資本の流通過程、(3)両過程の統一または資本と利潤、という区分が理論的な著作全体にたいしてもつ意義がますます明らかになり、この編成が非常に重要であり決定的であることが判明し、最初のプランでは独立の諸篇をなすはずだった諸論題(たとえば「諸資本の競争」、「信用」、「土地所有」)もしだいにこの編成のなかに含まれるようになった。こうして、三つの理論的な部分がますます明瞭な輪郭を得てきて、経済学のすべての理論的な問題をそのなかに取り入れてくるにつれて、マルクスは、『剰余価値に関する諸学説』は一つの独立な部分をなし第4部として全著作の結びとなるべきだ、という確信をますます強固にしたのである。(『剰余価値学説史』(1)) 大月版 P17-18)

同時にそのことは、「マルクスをはじめ、『資本一般』と資本の『実在的な』運動——競争と信用——とを徹底して分離していたが、彼はこの分離をしだいに放棄した。『……要綱』(「経済学批判要綱」のこと——青山)のあと、そして『……諸学説』(「剰余価値学説史」のこと——青山)の執筆にかかる直前には、彼は『1861～1863年草稿』すなわ

ち23冊のノートの中の]『最後のノート』のなかでまだ、剰余価値と利潤との区別は一つの転換ではなくて、二つの転換で示されるべきだと考えていた」が、「『……諸学説』のなかで、マルクスはこの方法を事実上廃棄した。研究の過程では有効だと認められてきたそのような切断のもつ諸限界が彼にわかってきたのであって、彼は、1862年12月のプラン草案が証明しているように、経済的諸関係の最も重要なもろもろの形態上の区別を資本関係の叙述のなかに取り入れようと考えたのである。それは『資本論』の第1部および第3部のための構成プランだったが、マルクスは、これらの部の執筆を進めるなかで、これらの構成プランにさらにもろもろの変更を加えていった。」(『マルクスの利子生み資本論』2 P386-387) ※なお、「剰余価値に関する諸学説」は「草稿」としての完成度が高く、研究の過程とはことなる叙述の仕方が求められていました。

この研究の過程とはことなる叙述の仕方は、「第1部」の執筆のあと「第2部」ではなく「第3部」を書いた理由にもつながっています。そのことについて、MEGAの「解題」は、次のように述べています。

「第1部から第3部に移ったことは、明らかに、マルクスが、本質と直接的な現象との、問題を孕んだ関連を矛盾なく説明すること、運動法則それ自体を暴くばかりでなく、同じくこの法則の貫徹メカニズムを証明することにも努めていたことに帰せられるべきものであった。彼の考えでは、理論全体の内的な一貫性はこのことにもとづいているのである。彼にとってまずもって肝心であったのは、問題の二律背反を明示的にはっきりさせ、科学的に批判的な解決を与えることであったが、最後には、体系的に論述することに重きが置かれていた。」(P389-390)と。

そして、第3部の執筆を中断し第2部の草案を書いた理由については、MEGAの「成立と来歴」は、「その理由はたぶん、『1861～1863年草稿』のノートXVIIでは利潤の平均利潤への転化がまだ包括的には仕上げられていなかったことにあったのであろう。……叙述の論理によって、結局マルクスは、当該の欠落部分を埋めることを、それゆえに第3部の執筆を中断してまず第2部を仕上げることを強制されたのである。」(P403-404)と述べています。

このように、「第1部」の執筆のあと「第2部」ではなく「第3部」の第2章(『資本論』では「章」は「篇」となっている——青山)→第1章→第3章と書いた理由と、今度は第3部の執筆を中断し第2部の草案を書いた理由とは、基本的に同じものです。そして、1862年12月のプラン草案の「8)産業利潤と利子とへの利潤の分裂。商業資本。貨幣資本。」を『資本論』では「第4章」と「第5章」との二つの章に分割したことについて述べている次の文章もそのことをよくあらわしており、マルクスの「叙述の仕方の転換」によるものです。

「第2部の執筆からえられたもろもろの認識がすでにこの変更の根拠となっていたのかもしれない。剰余価値を生産する諸資本のあいだの競争戦のもろもろの基本的な法則性を論じている、草案の最初の三つの章(「章」は『資本論』の「篇」のこと——青山)を書いたのちに、マルクスが直面したのは、特殊的、派生的な資本諸形態の叙述は生産的資本の諸変態の叙述からどのようにして厳密に区切られるべきか、両者のあいだの諸移行は個々的にはどのような姿態をとるのか、という問題であった。この問題の解決は、資本の流通過程の分析を前提していた。最後に第3部で展開されているような諸資本の現実的運動を

論じることができるようになる前に、まずもって、諸資本のそのような自立化の可能性が——つまり諸資本の形態的運動が——表現されなければならなかった。そのさいに、商人資本と利子生み資本とは二つの質的に異なる自立的な資本形態だ、という認識が固まったのであって、このことが、この両形態を別個に叙述することを要求したのである。」(P405)

これらの執筆の軌跡は、マルクスが研究した問題の範囲がますます大きく広がって行くにつれ、そして、研究が煮詰まって行くにつれて、マルクスは『剰余価値学説史』執筆前の研究の方法に基づく叙述の仕方から、本質と直接的な現象とのシームレスな貫徹メカニズムを示し、体系的に論述することに叙述の仕方を変えたことの現れでした。

ただし、私は上記の文章の最後のセンテンスには同意できません。マルクスは、当然、「商人資本と利子生み資本とは二つの質的に異なる自立的な資本形態だ」という「認識」は当然もっていたが、研究の段階では同じ「剰余価値」を源泉とする二種類の「資本」と見ることを優先し、研究段階から著作として『資本論』を世に出すにあたって、「質的に異なる自立」性を明確にした「章」立てにすることが、有効であり枝ぶりの良い作品になると考えたのだと思います。